

乳幼児の心的状態への理解に及ぼす性別と育児経験 の影響

山田, 悠未
九州大学大学院人間環境学府

五位塚, 和也
九州大学大学院人間環境学研究院

古賀, 聡
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/2228891>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 18, pp.97-104, 2017-03-23. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



乳幼児の心的状態への理解に及ぼす性別と育児経験の影響

山田 悠未 九州大学大学院人間環境学府
五位塚和也 九州大学大学院人間環境学研究院
古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院

The influence of gender and child-care experience in understanding infants' mental states

Yumi Yamada (Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

Kazuya Goitsuka (Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University)

Satoshi Koga (Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University)

The purpose of this study was to investigate the influence of gender and child-care experience on Insightfulness (the capacity for insight into children's thoughts and feelings) and the approach taken toward infants. Participants were parents with children aged 0-6 years (10 fathers and 10 mothers) and college students with no child-care experience (10 men and 10 women). Participants viewed four video clips of interactions between non-participant parents and children. Subsequently, participants were interviewed regarding infants' thoughts, as well as their feelings and approach toward infants. Participants' Insightfulness was estimated using a revised measure, based on one originally developed by Oppenheim & Koren-Karie (2002). A two-factor ANOVA showed a significant difference for feelings of infants according to the presence of child-care experience. The results also indicated that parents felt anger toward infants more than college students did, and thus, we considered the necessity of supporting parents' ability to adjust their emotions. Moreover, our study inferred that college students harbor anxiety concerning children because they don't have a detail notion of child-care.

Key Words: infants, understanding mental states, gender, child-care experience

問題と目的

近年、少子化や核家族化の進行、地域のつながりの希薄化など社会環境が変化するなかで、母親の育児をめぐる様々な問題が顕在化してきた。身近に相談できる相手がいないなど、社会からの孤立感や疎外感を抱く母親も多く、そのために母親の育児負担感や育児不安が増大していることが問題視されている（厚生労働省, 2011）。特に乳幼児期の育児については、若者の過半数が最も大変な時期であると捉えており（厚生労働省, 2013）、子どもが自分の気持ちを言語化することが難しい乳幼児期においては、養育者が子どもからのシグナルを汲み取り、子どもの気持ちを解釈し、その解釈に応じて子どもに対応することが求められると考えられる。また、子どもの心的状態への読み取りがうまくできないことによる育児困難感や負担感の高まりが推測され、そのような育児ストレスが蓄積されると育児ノイローゼや虐待などの問題につながるリスクを高めることが指摘されている（牧野, 1982; 中谷・中谷, 2006）。以上のように、育児支援を考えるときに育児環境の整備に加えて、乳幼児の心的状態に対する養育者の理解を促すことも重要である

と思われる。

従来、発達早期における乳幼児と養育者との関係性の問題については、心理学の領域ではアタッチメントという概念をもとに検討されてきた。これまでの研究で、乳幼児が主要な養育者との間で形成した安定したアタッチメントは、その後、乳幼児の社会情緒的発達や他者の心情理解の発達を促進させることが示されてきた（Fonagy et al., 1997）。そのような安定したアタッチメント形成に寄与する要因の一つとして、養育者の「敏感性 sensitivity」が注目されてきた（Ainsworth et al., 1978）。しかし、近年この「敏感性」よりも、養育者の「子どもの心に目を向ける傾向」がアタッチメント安定性に関連していることが報告された（Koren-Karie et al., 2002）。Oppenheim et al. (2001) は、養育者が子どもを感情や思考をもった存在として扱い、子どもの行動の背景にある感情や意図、動機といった心的状態に注意を向ける傾向を「洞察性 insightfulness」と名付け、子どもに対する応答行動の前提として洞察性をもつこと自体により重要な意味があるとした。つまり、養育者が子どもの行動の背景にある心的状態に注意を向けることで、そこから得られた理解をもとに適切な応答行動をとることができると考えられ

る。さらに、養育者の豊かな「洞察性」は、子どもとの安定したアタッチメント形成だけでなく、子どもの心の理論獲得を促進すると考えられている (Fonagy et al., 2007)。

養育者が子どもの行動の背景にある心的状態に目を向けて理解しようとする中で、相互に不満と嫌悪を引き起こすような親子間交流を防ぐことにつながり (Allen et al., 2008 / 2014), 養育者の育児不安や育児困難感が軽減すると考えられる。小原 (2005) は母親が乳幼児の情動を読み取る力と育児困難感との関連を調査し、母親が乳幼児の不快感情の読み取りを回避し、泣きやぐずりといった反応に適切に関わるのが難しいほど、育児困難感を抱きやすい可能性を示した。したがって、養育者が子どもの心的状態を認知して適切に応答する関わりは、養育者の精神的健康を保つためにも重要であると考えられる。

しかしながら、現代の若者は実際に親となるまでに育児に関わることや乳幼児に触れる機会がほとんどないため、乳幼児との具体的なやりとりを想定することが難しく、乳幼児の心的状態に目が向きにくい可能性が考えられる。岩立・竹田 (2000) は、実際の育児の行動観察をもとに大学生の幼児理解を質的に分析し、大学生は保育者に比べて幼児の意図や動機などの内面と関連付けて幼児を理解しようとする傾向が乏しいことを示した。また、小野寺 (2003) は、親になる前と後の自己概念の変化について調査し、親になる前の想定より実際に育児が始まった後の方が怒りやイライラを感じることを報告した。さらに、奥田ら (2010) は、これから親になる可能性のある大学生の育児意識を調査し、育児について現実的なイメージがもちづらいために、大学生は育児に対する不安や自信のなさを抱いていることを示した。以上の知見より、育児経験のない若者は実際に乳幼児と接する機会が乏しいために、乳幼児の行動とその背景にある心的状態を理解することが難しく、そのために親になることに不安を感じることや、実際に育児を始めた時に予想以上の負担感を抱くことが推察される。

しかし、篠原 (2009) が指摘するように、将来的に親になる可能性のある大学生や養育者など、大人が示す乳幼児の心的状態の理解については、我が国においては研究がほとんどなされていないのが現状であり、乳幼児の心的状態の理解に影響を及ぼす関連要因についても明らかにされていない。特に、岩立・竹田 (2000) の報告のように、育児経験の有無が乳幼児の心的状態への理解に影響を及ぼす要因として考えられるが、両者の関係性は明らかにされていない。育児経験のない者に対して乳幼児への洞察性を高めることは、育児に対する不安や負担感の予防的介入となることが十分に考えられる。したがって、育児経験の有無が乳幼児の心的状態の理解に及

ぼす影響について実証的に明らかにすることは臨床心理学的な意義があると考えられる。

また、大人が示す乳幼児の心的状態への理解に影響を及ぼす要因として、性別が考えられる。従来から、養育者の性別によって育児に対する意識や養育態度が異なることが指摘されてきた (柏木・若松, 1994; 奥田, 1996; 中道, 2013)。近年では、父親の積極的な育児参加が推奨されているが、男性は女性に比べて親になる実感や心の準備が十分にできないまま親になることが考えられ、その結果父親は子どもの心を読み取ることがうまくできず、父親である自分に自信がもてない可能性が指摘されている (小野寺ら, 1998)。また、久保ら (2013) においては、子どもが指示に従わないことにストレスを感じる父親が多いことも示された。以上の知見から、男性は女性に比べて子どもの心的状態に目が向きにくく、育児参加に対して戸惑いや困難感を抱きやすい可能性が考えられる。そこで、父親や父親になる以前の男性に対して、乳幼児の心的状態の理解を促していくことは、父親自身の育児に対する負担感の緩和だけでなく、母親の負担感の緩和 (荒牧・無藤, 2008) や子どもの社会性の発達 (加藤ら, 2002) につながる有用な支援として期待できる。したがって、性別の要因が乳幼児の心的状態の理解に与える影響について検討することにおいても臨床心理学的な意義があると考えられる。

以上より、本研究では、性別と育児経験の有無が、乳幼児の心的状態に注意を向けて理解する傾向と理解に応じた乳幼児への働きかけに与える影響について検討する。具体的には、本研究では、ある親子の相互交渉の様子を映像刺激として呈示し、子どもの行動の動機に関する質問や子どもへの働きかけに関する質問についてインタビュー調査を行う。そして、乳幼児の心的状態への理解を測定するために、インタビュー調査での回答を、洞察性評価尺度 (Oppenheim & Koren-Karie, 2002) を参考に作成した7つの評定尺度を用いて評定する。育児経験が乳幼児の心的状態の理解に与える影響について検討するために、乳幼児期の子どもをもつ養育者と育児経験のない大学生の2群を設定し、性別の要因と併せて分析を行う。

方 法

1. 調査対象者

調査対象者は、0歳から6歳までの子どもをもつ父親10名 (*Mean*: 35.4歳, *SD*: 6.08, *Range*: 28歳–47歳) と母親10名 (*Mean*: 34.7歳, *SD*: 4.62, *Range*: 27歳–43歳)。A県内の大学に通い、日常的に乳幼児と接する機会をもたない男子大学生10名 (*Mean*: 22.0歳, *SD*: 1.56, *Range*: 20歳–25歳) と女子大学生10名 (*Mean*: 21.5歳, *SD*: .85, *Range*: 20歳–23歳) であった。

2. 実験刺激

乳幼児のいる家庭に映像刺激を作成するための協力を依頼した。研究の趣旨及び個人情報保護について文書で説明して合意を得た後、親子の日常的なやりとりの様子を1時間程度動画撮影した。本調査は、子どもの行動の動機の推測や大人の情緒的反応、対処方法に関する調査対象者間の差異を測定することを目的としていた。そのため、動画記録のなかでも養育者が対応に困難を感じたであろう場面を抽出し、1～2分程度の映像刺激を4つ作成した。それぞれの場面の具体的なやりとりについては、Table 1に記載した。なお、子どもの対処困難な行動が見られる場面は作為的に撮影したのではなく、撮

影中に偶然に起きた出来事であった。

3. 調査手続き

調査対象者に対して、研究の趣旨や回答を録音することについて、また回答の中断が可能であることを予め口頭で伝えた。調査に対する合意を得た後、映像刺激を一場面呈示するごとに①乳幼児の行動の動機、②調査対象者がその場面に遭遇した場合の感情、③乳幼児の行動に対する働きかけについて質問を行った。質問項目については、Oppenheim & Koren-Karie (2002)を参考に、呈示する映像刺激の内容に沿って筆者が独自に作成した (Table 2)。なお、映像刺激を呈示する順番は調査対象者ご

Table 1
刺激映像の各場面の詳細

場 面	内 容
場面1 11ヶ月の子どもの父親がやりとりをする場面	子どもが声を上げながら要求の指差しを繰り返し、父親を振り回す場面を含む。
場面2 10ヶ月の子どもの父親がおやつを食べる場面	子どもが自ら体を動かして椅子からずり落ちそうになる場面を含む。
場面3 11ヶ月の子どもの母親がおやつを食べる場面	おやつがなくなった後に子どもがなき声をあげて部屋をうろうろする場面を含む。
場面4 1歳10ヶ月の子どもの母親がおやつを食べる場面	子どもがコップに入ったお茶を机の上にひっくり返してこぼす場面を含む。

Table 2
インタビュー調査の質問項目

場 面	質問項目
場面1 11ヶ月の子どもの父親がやりとりをする場面	①子どもはなぜ声をあげていたと思うか。 ②回答者が映像の中の父親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、声をあげる子どもを見てどんな気持ちになるか。 ③回答者が映像の中の父親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、声をあげる子どもにどう働きかけるか。
場面2 10ヶ月の子どもの父親がおやつを食べる場面	①子どもはなぜ椅子からずり落ちそうになったと思うか。 ②回答者が映像の中の父親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、椅子からずり落ちそうになる子どもを見てどんな気持ちになるか。 ③回答者が映像の中の父親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、椅子からずり落ちそうになる子どもにどう働きかけるか。
場面3 11ヶ月の子どもの母親がおやつを食べる場面	①子どもはなぜなき声をあげていたと思うか。 ②回答者が映像の中の母親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、なき声をあげる子どもを見てどんな気持ちになるか。 ③回答者が映像の中の母親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、なき声をあげる子どもにどう働きかけるか。
場面4 1歳10ヶ月の子どもの母親がおやつを食べる場面	①子どもはなぜお茶をこぼしたと思うか。 ②回答者が映像の中の母親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、お茶をこぼす子どもを見てどんな気持ちになるか。 ③回答者が映像の中の母親の代わりに映像の子どもと関わるようになったとして、お茶をこぼす子どもにどう働きかけるか。

注：回答者の回答が曖昧である場合に以下の追加質問を行った。

- ① どうして○○だろうなと思われたのですか。
- ② どの場面を見てそう思われましたか。

とにカウンターバランスをとった。

4. 評定

子どもの心的状態に注意を向ける傾向について、インタビュー調査で得られた回答を客観的に評価するための指標として、Oppenheim & Koren-Karie (2002) が開発した洞察性評価尺度を参考に、本研究の手続きに沿って項

目内容を独自に改編し、7項目を設定した (Table 3)。各場面に対する①乳幼児の行動の動機に関する質問の回答から、子どもの行動の動機に注意を向ける傾向について「複雑性」と「洞察性」の項目で評定した。各場面にに対する②調査者の感情と③乳幼児に対する働きかけに関する質問の回答から、子どもに対して向ける調査対象者自身の感情について、「受容」「怒りと敵意」「心配」で

Table 3
評定尺度の得点と定義

評定項目	評定の基準	語りの例
複雑性	1点 子どもの行動の背景にある複数の感情や考えに言及しない	意味はない。
	2点 子どもの行動の背景にある複数の感情や考えについて複数語るが、その内容は類似し、偏っている	「あれ取って」とか「あっち行って」という自己主張。
	3点 子どもの行動の背景にある複数の感情や考えを語っている	好奇心。ごちそうさまをアピールしてる。お茶じゃないものが飲みたい。
洞察性	1点 子どもの行動の背景にある考えや感情を語らない	椅子がつるんとして滑った。
	2点 子どもの行動の背景にある考えや感情を語るが、明確さや具体性に欠ける	何かしらの意思があってそれを伝えたかった。
	3点 子ども行動の背景にある考えや感情を明確で具体的に語る	最初は目的のものがあって、絵本も面白そうで読んでみたけど、やっぱり抱っこして色々連れて行って欲しい。
受容	1点 子どもの困った行動を意味のあるものとして理解していない	自由にしたらいいよとほっとく。
	2点 子どもの困った行動を意味のあるものとして理解しようとするが、理解した意味に応じた子どもへの働きかけをしない	お腹いっぱいかなと思うけど、膝に乗せて食べさせる。
	3点 子どもの困った行動を意味のあるものとして理解しており、理解した意味に応じて子どもに働きかけようとする	次々に好奇心が湧いてたから、子どもが一番欲しいものを探して納得するまでやりとりする。
怒りと敵意	1点 子どもの困った行動に対しても子どもに悪意はないとみなし、語りの中に怒りの感情は含まれない	
	2点 子どもの行動に悪意があるとみなしているが、語りの中に怒りの感情は含まれない。もしくは子どもの行動に悪意はないとみなしているが、語りの中に怒りの感情が含まれる	なんでこぼすのついてらってする。
	3点 子どもの行動を悪意があるものとみなし、語りの中に怒りの感情が含まれる	怒らせてみたいと思ってる。なんしよるとって怒る。
心配	1点 子どもの特徴や能力に関することや、自分自身の事柄に関する心配や懸念は語られない	
	2点 子どもの特徴や能力に関することや、自分自身の事柄に関して若干の心配や懸念が語られる	なんとか泣き止ませないとって不安になる。
	3点 子どもの特徴や能力に関することや、自分自身の事柄に関して強い心配や懸念が語られる	親は守らなきゃいけないから、突然予測不可能なことをされるとすごく焦る。
語りの豊かさ	1点 情報量が少なく、明確さや具体性に欠ける	好きなようにさせる。
	2点 情報量は少なくないが、明確さや具体性に欠ける	何回もやりだしたらそろそろ教えていかないとけないな。
	3点 明確で具体的な内容で、多くの情報を語っている	座らせてみたら声をあげるから抱っこする。そしたら指さしたからそこに行って子どもを近づけてあげて触らせてあげる。
語りの一貫性	1点 子どもに関する語りに矛盾した点を含む	子どもは座りたくないと思うが、ずっと座らせ直させる。
	2点 子どもに関して多様な見方をして語らないが、矛盾した点が含まない	子どもは水で遊んでたと思うから、なんでこぼしたとって聞く。
	3点 子どもに関して多様な見方をして語り、矛盾した点が含まない	食べ物とかお父さんを見ようとしていたから、お皿ごと手に持たせたり横からあげたりする。

評定した。各場面に対する①②③の質問の回答から、調査対象者の回答の具体性について「語りの豊かさ」、回答の一貫性について「語りの一貫性」で評定した。それぞれの評定項目については3件法を設定した。なお、評定は臨床心理士の資格を有し、本研究の目的や回答者に関する情報は与えられていない2名が行った。複数評定者間の一致率は「複雑性」76.5%、「洞察性」81.3%、「受容」81.9%、「怒りと敵意」96.9%、「心配」95.0%、「語りの豊かさ」84.9%、「語りの一貫性」86.9%と、どの評定尺度においても高い一致率であったため信頼性が確認された。各調査対象者のそれぞれの評定項目の得点は、4場面の評定の合計点から算出した。

なお、統計学的検定を実施する際には、全てSPSS22.0を使用した。

結 果

性別（男・女）と育児経験の有無（育児経験あり・育児経験なし）を独立変数、評定尺度の得点を従属変数とする、2×2の二要因被験者間分散分析を行った。結果の一覧をTable 4に示す。

1. 乳幼児の行動の動機に関する評定項目得点の分析

「複雑性」については、性別（ $F_{(1,40)}=.02, n.s.$ ）と育児経験の主効果（ $F_{(1,40)}=.10, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,40)}=.39, n.s.$ ）の全てにおいて有意な結果は示されなかった。「洞察性」については、性別（ $F_{(1,40)}=.05, n.s.$ ）と育児経験の主効果（ $F_{(1,40)}=.21, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,40)}=.83, n.s.$ ）の全てにおいて有意な結果は示されなかった。

2. 乳幼児の行動に対する調査対象者自身の感情に関する評定項目得点の分析

「受容」については性別（ $F_{(1,40)}=1.26, n.s.$ ）と育児経験の主効果（ $F_{(1,40)}=.02, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,40)}=1.88, n.s.$ ）の全てにおいて有意な結果は示されなかった。「怒りと敵意」については、性別の主効果（ $F_{(1,40)}=.83, n.s.$ ）と交互作用（ $F_{(1,40)}=.21, n.s.$ ）は有意ではなかったが、育児経験の主効果（ $F_{(1,40)}=5.17, p<.05$ ）が有意であり、育児経験あり群の方が育児経験なし群よりも得点が高かった。「心配」については、性別の主効果（ $F_{(1,40)}=2.79, n.s.$ ）と交互作用（ $F_{(1,40)}=1.13, n.s.$ ）は有意ではなかったが、育児経験の主効果が有意であり（ $F_{(1,40)}=8.31, p<.01$ ）、育児経験なし群の方が育児経験あり群よりも得点が高かった。

3. 回答全体の傾向に関する評定項目得点の分析

「語りの豊かさ」については、性別の主効果（ $F_{(1,40)}=.01, n.s.$ ）と交互作用（ $F_{(1,40)}=.17, n.s.$ ）は有意ではなかったが、育児経験の主効果が有意傾向であり（ $F_{(1,40)}=3.74, p<.10$ ）、育児経験あり群の方が育児経験なし群よりも得点が高かった。「語りの一貫性」については性別（ $F_{(1,40)}=.95, n.s.$ ）と育児経験の主効果（ $F_{(1,40)}=.05, n.s.$ ）、交互作用（ $F_{(1,40)}=.01, n.s.$ ）の全てにおいて有意な結果は示されなかった。

考 察

1. 性別と育児経験の有無が乳幼児の心的状態への理解に及ぼす影響

対処困難な子どもの行動の背景にある思考や感情に目を向け、行動の動機について明確で具体的に語るかどうか

Table 4

性別と育児経験による各評定項目の平均値と標準偏差および分散分析結果

評定項目	育児経験あり		育児経験なし		分散分析		
	男性 (n=10)	女性 (n=10)	男性 (n=10)	女性 (n=10)	性別	育児経験	交互作用
複雑性	7.90 (2.08)	8.20 (2.25)	8.50 (2.17)	8.00 (1.56)	.02	.10	.39
洞察性	8.50 (1.51)	8.80 (1.62)	9.10 (1.37)	8.60 (.97)	.05	.21	.83
受容	10.0 (1.25)	10.1 (1.45)	10.5 (.53)	9.50 (1.58)	1.26	.02	1.88
怒りと敵意	5.00 (.82)	5.10 (.74)	4.40 (.52)	4.70 (.68)	.83	5.17*	.21
心配	4.50 (.85)	4.30 (.68)	5.80 (1.48)	4.90 (.99)	2.79	8.31**	1.13
語りの豊かさ	8.00 (3.16)	7.70 (3.77)	5.70 (2.58)	6.20 (2.78)	.01	3.74†	.17
語りの一貫性	8.60 (2.68)	8.00 (2.31)	8.50 (1.27)	7.80 (1.93)	.95	.05	.01

注：上段は平均値、下段は標準偏差を表す。

かについて、「複雑性」と「洞察性」の尺度項目で評価された。その結果、2つの尺度において性別や育児経験の有無による差は見られなかった。Oppenheim & Koren-Karie (2002) による豊かな「洞察性 insightfulness」とは、子どもとのやりとりの中で子どもの多様な心的世界を理解し受容していくことであり、本来子どもとの相互作用の中で評価されるものであると考えられる。しかしながら、本研究では子どもをもたない大学生も調査対象としていたため、第三者の親子がやりとりをする場面の映像を視聴して子どもの行動の動機を推測するという方法を用いた。したがって、乳幼児の表情や発声、親子の相互交渉といった客観的に観察可能な手がかりを利用して子どもの意図や動機を理解することが可能であった。故に、性別や育児経験の有無といった要因とは関連し難い認知的な課題となった可能性が考えられる。

2. 育児経験の有無が乳幼児に対して抱く感情に及ぼす影響

対処困難な子どもの行動に対して抱く感情について、「怒りと敵意」「心配」の尺度項目で評価された。その結果、両者において育児経験による差が認められた。「怒りと敵意」では、子どもの対処困難な行動に対して怒りを感じたり、子どもの行為を悪意があるものと捉える程度が評定され、大学生群より養育者群の方が子どもに対して怒りの感情を抱くことが示された。大学生群においては、子どもの困った行動に対する感情を尋ねた質問に対して「かわいい」という回答が頻繁にみられた。親になる前の想定よりも実際の育児生活は忙しく、怒りやイライラを感じやすいことが報告されているように（小野寺, 2003）、育児経験のない大学生群は実際の育児の大変さや苦勞を想定することが難しかったために、楽観的な見方をする回答が多かったと推察される。一方、養育者群は自身の育児経験をもとに映像の場面をより現実的にイメージしたため、日常的な子どもの困った行動に対しても怒りの感情を想定したと考えられる。育児生活のなかでの怒りや苛立ちは、育児負担感や育児ストレスに繋がりうると考えられ、それらが蓄積されると育児ノイローゼや（牧野, 1982）や虐待といった養育上の問題につながるということが指摘されている（中谷・中谷, 2006）。したがって、子どもの対処困難な行動に対して怒りの感情を抱いたり、敵意的認知をする養育者に対して、情動のコントロールを促す支援が必要であると考えられる。

「心配」では、子どもの特徴や能力、あるいは自分自身の関わりについて強い心配や懸念を示すかどうかの評価された。その結果、養育者群より大学生群の方が心配や懸念を抱きやすいことが明らかとなった。これまで、牧野 (1981) や奥田ら (2010) などの研究から、これから親になろうとする若者は育児に対して不安を抱いてお

り、親になることに自信がもてないと感じていることが報告されてきた。本研究においてもこれらの先行研究と同様の結果が得られたと思われる。親になる以前の青年が育児に対して不安を感じる要因の一つに、親になるまでに育児に触れる機会がほとんどなく、育児に対する現実的なイメージを抱き難いということが考えられる。以上の結果より、育児経験や乳幼児との接触経験の乏しい青年に対して、実際に乳幼児とのやりとりを経験する機会を設けるなど、青年が育児に関して具体的なイメージをもてるよう支援することも必要と言えよう。このような支援により、青年が乳幼児とやりとりをする際に抱く戸惑いや不安を軽減することにつながる可能性があると推察される。

3. 育児経験の有無が回答の具体性に及ぼす影響

回答全体にわたる語りの情報量や具体性について、「語りの豊かさ」の尺度項目で評価された。その結果、育児経験の有無による差が認められ、育児経験のある養育者群の方が大学生群よりも得点が高い傾向にあることが示された。育児経験のない大学生群は、子どもの心的状態に目を向けてその動機に応じた関わりを想定するが、子どもに対する働きかけ方についての詳細な回答は少なかった。大学生群は何とか子どもの要求に応じたいという気持ちはあるものの、どのように働きかけたら良いのか分からないというアンビバレントな状態であったと考えられ、そのような葛藤が「心配」の得点の高さに表れていたと推察される。一方、養育者群は子どもとのやりとりを具体的に想定した言葉かけや子どもの年齢に応じた対応の工夫といった詳細で豊かな語りが多く見られた。乳幼児の情動理解に関して、育児経験を重ねるにつれて育児経験や育児信念といった養育者の主観的な認知を利用することが増える可能性が指摘されている（小原・上嶋, 2013）。本研究においても、養育者群は映像刺激から得た客観的な情報だけでなく、普段の育児経験や育児信念といった養育者自身をもつ主観的な情報も手がかりにして回答していたと考えられる。

まとめと今後の課題

本研究は、性別と育児経験の有無が乳幼児の心的状態への理解と乳幼児への働きかけに及ぼす影響について分析することが目的であった。その結果、乳幼児の心的状態への理解において、性別や育児経験の有無による差は認められなかった。このような結果となった要因として、本研究の方法論上の問題が考えられた。本研究では、調査の刺激として第三者の親子がやりとりをする映像を用いたが、乳幼児の表情や発声、親子の相互交渉といった客観的に認知可能な手がかりから子どもの行動の意図

や動機を判断するような課題となっていた可能性があり、性別や育児経験による差が示されなかったと考えられる。一方、対処困難な子どもの行動に対して抱く感情については育児経験による差が認められ、養育者群は日常的な子どもの困った行動に対しても怒りの感情を抱くことが明らかとなった。一方、育児経験のない大学生群は、現実的な育児の想定が難しいために、子どもとの関わりに対して不安や戸惑いを抱くという結果が示された。この結果から、育児に対する現実感のない青年が実際に親となり、予想以上の負担や困難を感じる可能性が考えられた。したがって、青年が乳幼児と触れる機会や実際の育児を体験する機会を設けるといった支援の必要性が示唆された。そうすることで、育児に対する現実的な想定が可能となり、青年が乳幼児と関わる際の不安感や負担感の軽減につながると考えられる。

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。第1に、本研究の調査対象者は、各群10名であり、母集団全体を適切に反映したサンプルであるか疑問が残る。今後は調査対象者を増やして同様の調査を続けていくことで、結果の信頼性を高めていく必要があると考えられる。第2に、本研究では、第三者の親子がやりとりをする場面を映像刺激として用い、調査対象者がその場面に遭遇することを想定して回答する方法をとった。しかしながら、実際は子どもとの相互作用の中で様々な感情を抱いたり、子どもの困った行動に対して瞬時に対応する力が求められると思われる。したがって、本研究の方法論では大人の乳幼児理解について十分な知見が得られたとは言いがたい。今後は、調査対象者と乳幼児が実際にやりとりをする場面を映像刺激として呈示し、実際の相互交渉のなかで乳幼児の心的状態に目を向ける傾向について検討していく必要があると考えられる。また、今後の展望として、性別や育児経験の有無との関連だけでなく、大人自身の被養育経験や性格特性と子どもの心的状態に目を向ける傾向との関連についても調査を行うことで、より個別的な支援のあり方を検討することができると考えられる。

〈付記〉

本研究の調査を実施するにあたって、お忙しいなかご協力くださいましたお父様、お母様、お子様に心より御礼申し上げます。また、本論文を作成する過程においてご協力をいただきました九州大学大学院人間環境学研究院細野康文様、同大学院人間環境学府藤山奈々様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Walls, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange situation*. Hillsdale, New Jersey: Erlbaum.
- Allen, J., G., Fonagy, P., & Bateman, A., W. (2008). *Mentalizing In Clinical Practice*. Washington D.C.: American Psychiatric Publishing, Inc. 狩野力八郎、監修・上地雄一郎・林 創・大澤多美子・鈴木康之(訳) (2014). *メンタライジングの理論と臨床：精神分析・愛着理論・発達精神病理学の統合*, 北大路書房.
- 荒牧美佐子・無藤 隆(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, 19(2), 87-97.
- Fonagy, P., Redfern, S., & Charman, A. (1997). The relationship between belief-desire reasoning and positive measure of attachment security (SAT). *British Journal of Developmental Psychology*, 15, 51-61.
- Fonagy, P., Gergely, G., & Target, M. (2007). The parent-infant dyad and the construction of the subjective self. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 48, 288-328.
- 岩立京子・竹田小百合(2000). 学生の観察による幼児理解の過程. *日本教育心理学総会発表論文集*, 42, 633.
- 柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, 5(1), 72-83.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツ子・土谷みち子(2002). 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる2つのコホート比較から. *発達心理学研究*, 13(1), 30-41.
- Koren-Karie, N., Oppenheim, D., Dolev, S., Sher, E., Etzion-Carasso, A. (2002). Mothers' insightfulness regarding their infants' internal experience: relations with maternal sensitivity and infant attachment. *Developmental Psychology*, 38(4), 534-542.
- 久保恭子・倉持清美・岸田泰子・及川裕子・田村 毅(2013). 幼児をもつ父親のワークライフバランスとその関連要因. *東京学芸大学紀要 総合教育科学系*, 64(2), 203-209.
- 厚生労働省(2011). 平成23年度版厚生労働白書. <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/11/dl/02-01.pdf>. (2016年8月20日取得)
- 厚生労働省(2013). 平成25年度版厚生労働白書. <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1->

- 02-3.pdf. (2016年8月20日取得)
- 牧野カツ子(1981). 育児における<不安>について. 家庭教育研究所紀要, **2**, 44-48.
- 牧野カツ子(1982). 乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>. 家庭教育研究所紀要, **3**, 34-56.
- 中道圭人(2013). 父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響. 静岡大学教育学部研究報告 人文・社会・自然科学篇, **63**, 109-121.
- 中谷奈美子・中谷素之(2006). 母親の被害的認知が虐待的行為に及ぼす影響. 発達心理学研究, **17**(2), 148-158.
- 小原倫子(2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. 発達心理学研究, **16**(1), 92-102.
- 小原倫子・上嶋菜摘(2013). 養育者による“子どもの情動を読み取る能力”のカテゴリー化 ―ビデオ刺激の活用による検証―. 岡崎女子大学研究紀要, **46**, 9-13.
- 奥田援史(1996). 養育態度のタイプと幼児の自立性. 滋賀大学教育学部紀要 教育科学, **46**, 1-7.
- 奥田雄一郎・後藤さゆり・大森昭生・呉宣児・平岡さつき・前田由美子(2010). 「親になること」の今日的意義の再検討と青年期のための次世代教育プログラムの開発: 経過報告. 共愛学園前橋国際大学論集, **10**, 175-185.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓(1998). 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究, **9**(2), 121-130.
- 小野寺敦子(2003). 親になることによる自己概念の変化. 発達心理学研究, **14**(2), 180-190.
- Oppenheim, D., Koren-Karie, N., & Sagi, A. (2001). Mother's empathic understanding of their preschooler's internal experience: Relations with early attachment. *International Journal of Behavioral development*, **25**, 6-26.
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mother's Insightfulness regarding their Children's Internal Worlds: The Capacity underlying Secure Child-Mother Relationships. *Infant mental health journal*, **23**(6), 593-605.
- 篠原郁子(2009). 母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達的变化について―後5年間に亘る縦断的検討―. 発達研究, **23**, 73-84.